



Title	音楽の普遍性に関する一考察 -「音楽は国境を越える」という意識はいかに形成されるのか-
Author(s)	西田, 治
Citation	教育実践総合センター紀要, 7, pp.107-116; 2008
Issue Date	2008-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/25958
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-27T20:50:28Z

音楽の普遍性に関する一考察

——「音楽は国境を越える」という意識はいかに形成されるのか——

西田 治（初等教育講座）

はじめに

音楽は国境を越えるのだろうか。

今回、ある国際交流を目的とした演奏会会場でアンケート調査をしたところ、上記の問いに対する回答は「音楽は国境を越える」とする意見が97パーセントを占めた。また、このようなアンケート調査をするまでもなく、メディア等でも一般論として「音楽は国境を越える」という意見を耳にする機会が多い。

しかしながら、民族音楽の分野では、「音楽は国境を越える」という音楽の普遍性に関しては否定的な見解が優勢であり、今もって決定的な見解が示されない程に困難なテーマの一つである¹。そこで、本稿では音楽の普遍性に関して全般的な議論を行うのではなく、その一端を明らかにすべく、「「音楽は国境を越える」という意識はいかに形成されるか」という問いを設定し、焦点を絞り考察を行おうとするものである。

1. 演奏会概要とアンケート分析

本稿の議論を進める上で一つの切り口を示すのが、国際交流を目的とする演奏会会場でのアンケートである。議論を始める前に先ずその演奏会の概要とアンケート結果について報告する。

1. 演奏会概要

アンケート調査を行った演奏会は、長崎大学と学術交流協定を結んでいる漢陽（Han-Yang）大学・音楽大学の学生によって編成されたウィンドオーケストラによるワールドコンサートツアー（アメリカ・東京・長崎・対馬での四公演）の一環として開催されたものである。長崎公演では、長崎大学小中附属学校との共演も行い、音楽での国際交流を目指しての開催となった。

第一部は漢陽大学による演奏、第二部は長崎大学附属小学校金管バンド部・同中学校吹奏楽部の演奏が主となってプログラムが進行した（図表1を参照）。このようなプログラムの流れだったため、第一部の漢陽大学の演奏の際には、附属小中学校の子どもたちが客席で演奏を聴き、逆に附属小中学校の演奏の際には、漢

漢陽大学の演奏者たちが客席で子どもたちの演奏を聴くという光景が見られた。漢陽大学の演奏を聴く子どもたちの真剣なまなざし、子どもたちの演奏をやさしく温かなまなざしで聴く漢陽大学の学生。演奏そのものも素晴らしかったが、その光景も非常に印象的で心温まるものであった。次に示す観客によるアンケート中の一文は、その様子をよく表している。

小中学校の演奏の時に大学の方が客席でやさしい表情で聴いていらっしゃいました。子どもたちは大学の方の演奏をしっかりと聴いていました。このお互いの姿こそ音楽を通じて持てる尊重の気持ちだと思います。そして観客もそれを感じることができました。30代・女性

またアンコールでは、漢陽大学・附属小中学校の3団体による合同演奏が行われた。曲目は日本の演歌をメドレーにしたものと韓国の民謡をテーマにした吹奏楽曲の二曲であった。両曲ともに漢陽大学ウィンドオーケストラ指揮者である柳田植氏の提案によるものであり、今回の演奏会の趣旨をよく理解してくださっての選曲であった。総勢約120名の大編成だったため、ステージは大変窮屈なものとなったが、互いの音を聞きながら、気遣いあいながらの演奏は大変感動的で、「アンコールが最高に良かった」という感想も多々聞かれたほどだった。観客数は278名と決して多くはなかったが、以上のようにとても温かな雰囲気の中で演奏会となった。



総勢約120名によるリハーサル風景

【図表 1】

<p>タイトル:漢陽大学ウインドオーケストラ 国際交流コンサート in 長崎</p> <p>指揮者:柳田植(Yoo, Jeon Sik)</p> <p>共演:長崎大学附属中学校吹奏楽部(指揮:田中邦夫)</p> <p>長崎大学附属小学校金管バンド部(指揮:山口亮介)</p> <p>開催日時:2007年10月18日(木)18:30 開演</p> <p>場所:とぎつカナリーホール 入場料:無料</p> <p>曲目:以下のとおり</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グランドマーチ (小長谷宗一) 2. 吹奏楽のための幻想曲「天使ミカエルの嘆き」(藤田玄播) 3. クラリネットとオーケストラのためのコンチェルティノーノ作品26 (C.M.v.ウェーバー) 4. Korea Rhapsody for Wind Orchestra (World Premier) (Ahn, Hyo-Young) <p>-----休憩-----</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. 【演奏:長崎大学附属中学校吹奏楽部】 センチュリア (J.スウェアリンジェン) 6. &7. 【演奏:長崎大学附属小学校金管バンド部】 管打楽器のための祝典 (J.スウェアリンジェン) ミッキーマウスマーチ (J.ドット) 8. ハイランド讃歌組曲 (P.スパーク) <p>◎アンコール(漢陽大学、附属小中学校による合同演奏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 演歌メドレー(北国の春/北酒場/川の流れるように) 小島里美編曲 ・ A Miller's Song(韓国の民謡をテーマとした吹奏楽曲。詳細不明。)
--

2. アンケート結果と分析

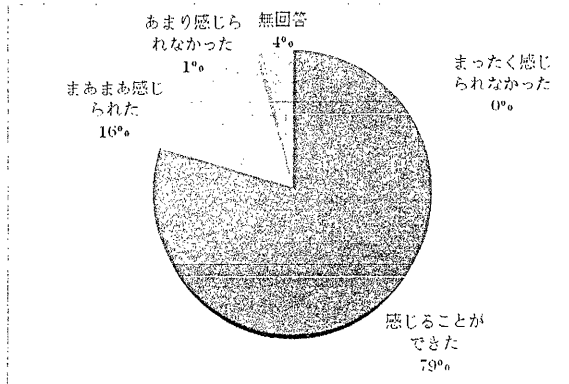
次に、演奏会当日に観客に対して行ったアンケートの集計結果を紹介する。観客の来場者数は 278 名で、アンケート回収数は 112 枚であった。回収率は 40% となる。

来場者数(人)	アンケート回収数(枚)	アンケート回収率
278	112	40%

アンケート内容は大きく 3 つの項目により構成し実施した。演奏会後の短時間に記入することを勘案し、最小限の項目数としている。

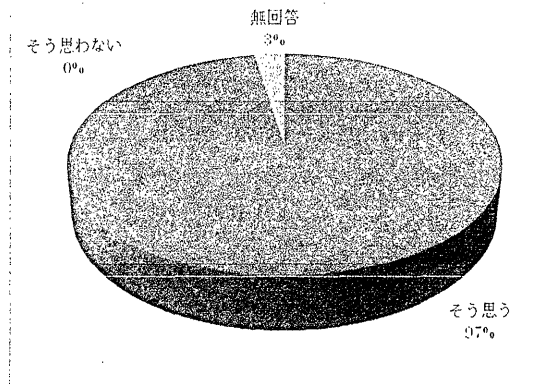
①「音楽での国際交流を感じる事ができましたか？」

感じる事ができた	まあまあ感じられた	あまり感じられなかった	まったく感じられなかった	無回答	合計
89	18	1	0	4	112



②-1「今回の演奏会に限らずに考えて、「音楽は国境を越える」と思いますか？」

そう思う	そう思わない	無回答	合計
109	0	3	112



②-2「その理由を教えてください（そう思う理由 or そう思わない理由）。自由記述」

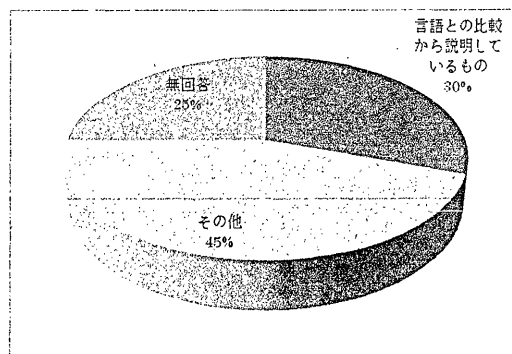
抜粋
・言葉は通じなくても音楽は理解でき、ともに感じる事ができるからです。16歳女性
・音楽のメロディーは共通のものだから、どの国の人も共感できると思う。55歳女性
・使う言葉がちがってそれが通じなくても音楽は世界共通で通じるところから。16歳女性
・言葉を使わなくても音で気持ちを伝えることができるから。言葉がわからない国の音楽でも感動することができる。17歳女性
・音楽は共通のものだと思うし、言葉も必要ないから。17歳女性
・言葉は通じないが音楽で気持ちが通じ合うと思う。41歳女性
・言葉はわからないが音楽は心が通じ合うと思います。63歳女性
・メロディーは万国共通。言葉は不要。53歳男性
・音楽は世界共通。40歳男性
・民族に関係なくたましいに訴えるものがある。52歳女性
・たとえば言葉が通じなくても、音楽は人の心に通じるから。19歳女性。
・言葉はわからないけれども音楽は同じ。誰でも理解できる。70歳女性
・言葉はなくても曲によって感情(思い)が伝わり、音楽によって共有できることが沢山ある。
・音は言葉と違い、すべて同じなので。38歳女性
・言葉はなくても感動する心はどこ国の人も同じだと思う。すばらしいものを共にすばらしいと思うことができる。49歳女性
・国境を越えないのは「言葉」だけで、絵も料理も音楽も皆オイシモノは世界共通オイ
・芸術に国境はなく、現実に外国で活躍する日本人、日本で活躍している外国人もいる。ただし日本人としてのアイデンティティはもっていられた。45歳男性
・アートこそ世界共通の言語と信じています。言葉、宗教、政治を越えて感動を分かち
・音楽は心にひびくので、こっさようをこえて世かひのみんなの心にひびいたことだろうと
・小中学校の演奏の時に大学の方が客席でやさしい表情で聴いていらっしやいました。子どもたちは大学の方の演奏をしっかりと聴いていました。このお互いの姿こそ音楽を通じて持てる尊重の気持ちだと思います。そして観客もそれを感じることができました。3
・言葉が通じなくても音楽は世界共通だと思うから。15歳女性
・えんそう、うたなどをきいている人も気持ちがいいし、ひいている人も歌っている人もすっきりした気持ちになれるからです。8歳女性
・言葉じゃなく、音楽で気持ちを合わせられるから。19歳女性
・人が感動するものは、その人の人生によるけれど、海を渡って、見たことも会ったこともない国の人が感動する曲を私たちもともに感動でき、同じ空間を共有できるのは音が様々な壁を飛び越えて私たちのもとに届いているから。21歳女性
・音楽は言葉を越えて、心に何かを感じ取るものだから。何かを感じ取るのは皆同じだと
・言葉がいらぬから。22歳女性
・言葉は通じないが、音楽で一つにまとまる。48歳女性
・言葉はいらぬから。年齢未記入女性

②-2 続き

・日本の曲は世界に広まっているし、たくさんの民謡曲などが日本にもたくさんはいつてきているから。14歳女性。
・音楽は世界の共通語だと思いました。47歳女性
・国を越えて曲は共通であるし、心に響く音も同じだと思います。年齢未記入女性
・私たちがこの場で韓国の曲を聴いても感動することができるから。12歳女性
・音楽は世界一体になって楽しみ親しみあえる。9歳男性
・音楽は対立する宗教、思想、哲学、経済、政治がないから。年齢未記入男性
・どの国の人が奏でも音楽は美しいから。年齢未記入女性
・ドレミは世界共通だから。演奏する喜びもよい演奏を聴いて感動する心も世界共通だから。45歳女性
・音楽はどの国も練習のたまものと思ってます。83歳男性
・言葉がなくても音だけで心を表現できるから。38歳女性
・音楽は言葉がちがっても人間の感性は同じだと思いますので、感動する心は共通のものだと思います。55歳女性
・音楽は言葉とか関係なく共有できるから。16歳女性
・言葉はちがっても音楽は世界共通にコミュニケーションできるから。17歳女性
・言葉はちがっても音楽は共通だから。44歳女性
・話す言葉はちがうが、音楽はすべての人に共通のものだから。11歳女性
・言葉がなくても伝わるものだから。初めての人もいっしょに楽しめるものだから。46歳女性
・音楽は文化に関係なく心に響くものだから。48歳女性
・言葉は伝わらなくても音楽が言葉になって気持ちを伝えることができるから。10歳女性
・音楽はどの国にもあり、すばらしい音楽はどの国の人の心にも響くと思う。言葉とはちがいが、共通に感じられるものだと思うから。25歳女性
・音楽は言葉がなくても心で伝わるものだと思うから。11歳女性
・想いは同じだから。36歳女性
・美しい音楽は、ころころと癒されると思います。44歳女性
・音は翻訳する必要がない。すんなり耳に心に入っていく。年齢性別未記入
・文化には、国境はないと思う。68歳女性
・歌など歌詞は分らなくても音楽の良さは分かる。50歳男性
・曲を作った人の国、演奏する人の国、聴く人の国、ことばは通じなくとも、それぞれの音楽を愛する気持ちは互いに感じあえると思います。45歳女性
・演奏会で言語がなくても(違っても)気持ちが伝わってきたから。23歳男性
・音楽の美しさ、楽しさは、どこの国に行っても、どこの国の人でも共通だと思うので…。43歳女性
・音楽を通しておけば他国に行っても仲良くできると思ったから。11歳女性
・音楽は万国共通。言葉は通じなくても音は通じます！31歳女性
・美しいもの・美しい音色というものは自然と心の中へしみいってきます。何ものにもとらわれず、心の中がやさしくなるのを覚えます。57歳女性
・音楽によって心を癒される。これは人間であればどの国でも人種の差別なく同じであると思う。悲しい事に合うと、悲しい静かな曲ですこしずつ元気になれるものです。60歳
・美しいものを求める心、愛する心は同じであると思う。心ひとつ音楽に向かうことで共感しあうことができます。41歳男性
・音楽を聴くことにより心に伝わるものがあると思う(生音)。37歳男性

質問項目②の分析…理由の内訳

記述された理由のうち「言語」との比較から説明しているものが多い印象があったため、「言語」をキーワードとして分析を行ったのが以下の結果である。「その他」の理由が多様である中、「言語」は30パーセントの割合を占めていた。

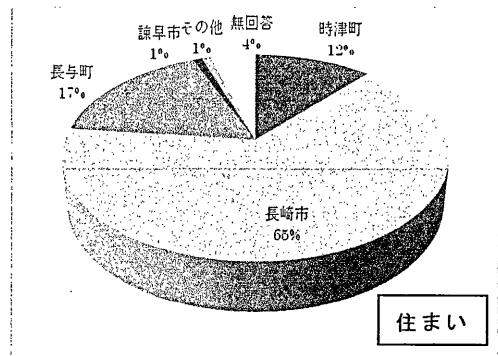
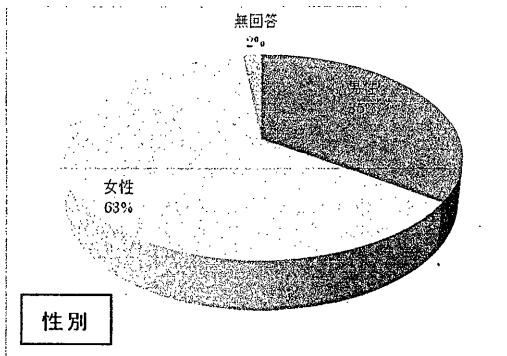


言語との比較から説明しているもの	その他	無回答	合計
34	50	28	112

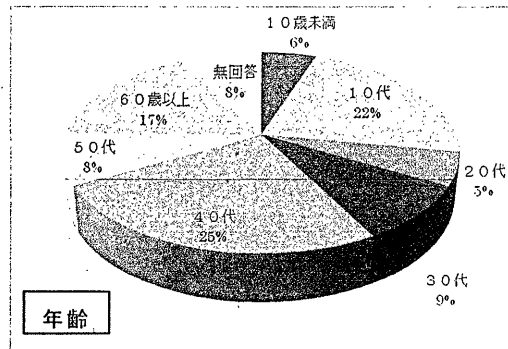
③ 来場者フェイスシート（年齢、住まいの場所、性別）

男性	女性	無回答	合計
39	71	2	112

時津町	長崎市	長与町	諫早市	その他	無回答	合計
13	73	19	1	1	5	112



10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60歳以上	無回答	合計
6	25	6	10	28	9	19	9	112



Ⅱ. 「音楽は国境を越える」という意識の形成

民族音楽の学問分野では結論の提出が難解なテーマであるにもかかわらず、本アンケートでは 97 パーセントの回答者が「音楽は国境を越える」と回答した。また、前項アンケート分析の②-2 から言語との比較からその理由を説明しているものが多いことが分かった。よってここでは言語との関係性を手がかりとして「音楽は国境を越える」という意識がいかにより形成されるかについて考察を行いたい。

言語による情報の移動は、一般的に次の【図表 2】のように捉えられている。この図から、情報は送り手から受け手へと流れる方向性であることが確認できる。また言語によるコミュニケーションでは、「共有された知識」が必要であることも示されている。つまり、受け手は送り手からの言語化された情報を言語処理するだけの語彙や言語に関する規則を持ち合わせていなければ情報を受信できないということになる。

では、音楽が送り手から受け手へと移動する場合はどうであろうか。一般的に

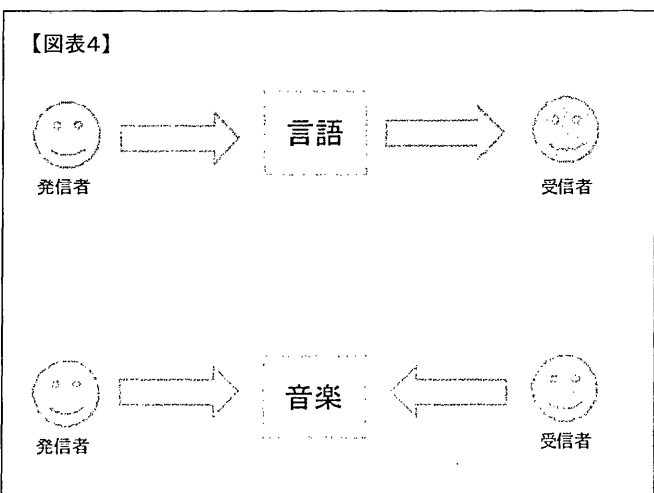
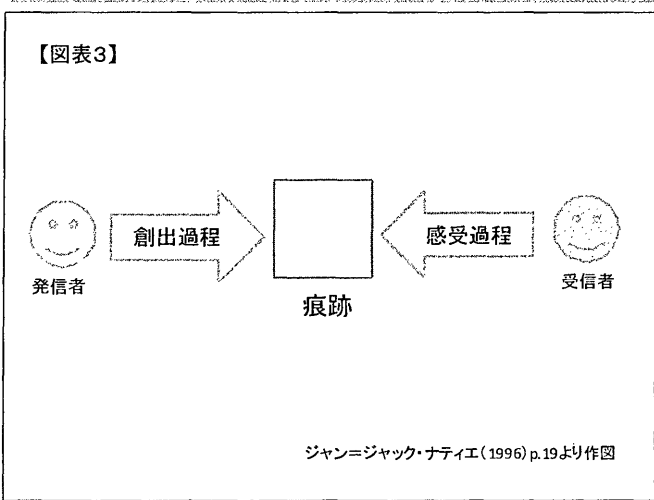
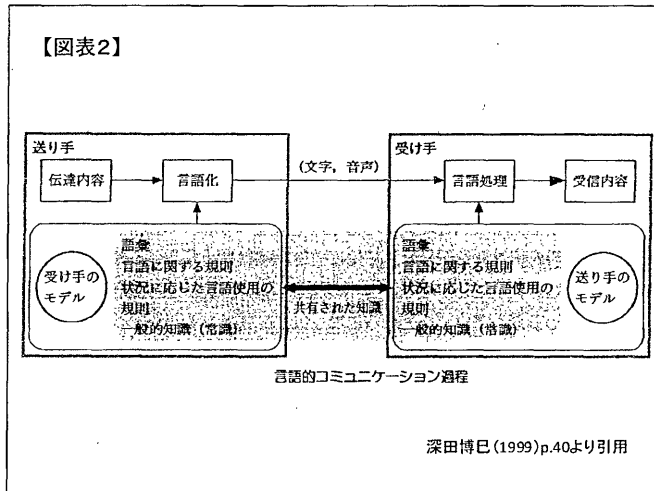
は、言語と同様に捉えられていると思われる。しかし、音楽記号学者であるジャン=ジャック・ナティエは、「発信者→メッセージ→受信者」という図式を「古くさいコミュニケーション理論図式」として、【図表3】のような図式を示している。

ここでは創出された音楽は楽譜であれ演奏であれ「痕跡」と

呼ばれ、受信者である聴き手はそれを主体的に解釈して受け取るという図式が示されている。つまり、音楽は送り手(作曲家、演奏者)の意図がそのまま忠実に受信者(聴き手)に伝わるというものではないということを示唆している。また合せてナティエは、音楽の捉え方にも示唆を与えている。それは、多くの作曲家がとる「音楽作品は作曲

活動や作品の成立状況のすべてを考え合わせなければ意味を持たない」という見解や、「音楽は現に聴き理解している限りのものとしてしか存在しない」という一般論や、「音楽作品はすべて作品の持つ内在的な特徴に還元することができる」という構造主義の立場、そのいずれにも還元することはできないというものである(ナティエ, 1996: pp.(1)-(2)より筆者要約)。

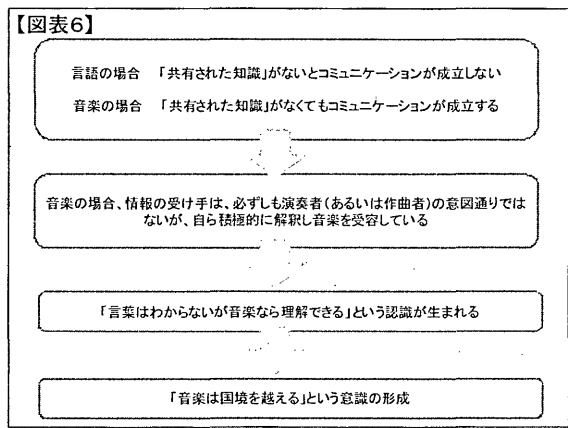
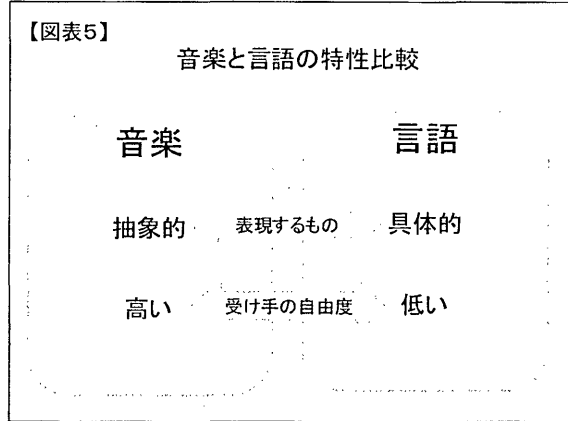
音楽もよりよく理解しようとするならば、言語と同様に「共有された知識」——音楽的な語彙や様式、音楽に関する規則、その音楽文化の常識など——があることが望ましいだろう。しかし、ナティエが示すように受け手が積極的に解釈し受け取っていることもまた一つの事実である。以上を図示すると【図表4】のように整理される。



受信者の立場となって考えてみると、言語の場合、発信者が何かを伝えてようとしても受信者が言語処理できない時は「理解できなかった」と感じるのに対し、音楽の場合、ナティエの図式から考えると、発信者が創出した音楽を受信者は自由に解釈して受け取るため「理解できなかった」という想いは抱かないということになる。

またこれに加えて音楽は言語に比べて表現するものが抽象的であり、受け手の自由度が高いという特性も関係していると考えられる（【図表5】を参照）。

以上のことから、言語は「共有された知識」がなければ情報を受信することができないが、音楽はそれがなくても情報の送受信が成立する。ここから「言語はわからなくても音楽なら分かる」つまり「音楽は国境を越える」という意識が形成されるものと考えられる。これが本稿の結論であり、まとめると【図表6】のように整理される。



Ⅲ. 再び「音楽は国境を越えるのか」について

先日、日本、中国、韓国の三ヶ国の学生による交流コンサートを聴く機会に恵まれた。国際交流を目的としていることもあり、演奏だけではなくスピーチを交えたプログラム構成となっていた。1人1人の学生がまず母国語でスピーチを行い、それを日本の学生が翻訳をし、その後、演奏を行うという流れである。曲目は、いわゆるクラシック音楽が中心であったが、いくつかは自国の民族楽器を用いたの伝統音楽の演奏も含まれていた。どの国の学生の演奏もそれぞれに良さや特徴があり、「理屈を超え、やはり音楽は国境を越える」と思わせられるものであった。

さて、「音楽は国境を超えない」とする民族音楽における見解は、安易に自文化の尺度で他文化をとらえてしまうことへの警鐘である、と私は捉えている。民族音楽学者・徳丸吉彦は次のように述べる。

音楽が「国際的」だ、という表現は、言語が異なる割に、類似の音楽様式

をもっていたヨーロッパの一部が言い出したことである。ドイツ語とフランス語が異なるのに、バッハがフランスの管弦楽法を使い、フランスの聴衆がモーツァルトを聴いたりするのを見れば、なるほど、狭い地域では、音楽は言語よりは国境を容易に超える、ということを感じた人々がいても不思議ではない。しかし、これを拡大して使うようになると、大きな間違いを犯すことになる。世界中に国々を越えて「普遍的に」通用するようになった音楽様式はない。ベートーヴェンの第九交響曲が東アジアの日本で歌われているからといって、それは、世界の音楽として通用するものではない。これを歌い、聴くのは、ドイツ文化、とくにドイツの文芸と音楽の基礎をなす部分が教育されている国に限られるからである。(徳丸吉彦 1996 : p.139-140)

徳丸が指摘するように、ある文化の音楽を本当の意味で分かるためには、それ相応の教育が施されていなければ理解はできない。西洋音楽を理解するためには、やはり西洋音楽の基礎的な部分の教育が必要となり、ある民族音楽を理解しようとするならば、やはりその民族の文化について学ぶ必要がある。そこに音楽教育の一つの可能性があるとも言える。そしてまた、時を超え、文化を越えての普遍的な音楽というものは存在しないであろうことも確かである。

しかし、「通じ合いたい」という「想い」や「願い」を持つ人々の交流の場では、やはり音楽は国境を越えるのである。それは思考を伴う頭での理解ではなく、想いを受け取る心での交流という意味においてである。そして、その想いや願いがきっかけとなり、本当の意味での異文化理解、相互理解の道が開けるのであれば、それは素晴らしいことであろう。この意味において、私は次の民族音楽学者・ブラッキングの意見に心から同感する。

音楽学と民族音楽学に関心を抱いている人達は、私が、さまざまな音楽システムを比較する基盤は何もないとか、音楽行動に関する普遍的理論は可能性がないとか、通文化的コミュニケーションは全く期待できないとか言っているようで、失望するかもしれない。しかし、われわれ自身の経験を考えてみれば、実際にはそうでないということがわかるはずである。音楽は時間と文化を越えることができる。モーツァルトやベートーヴェンの時代の人々の心を興奮させた音楽は、われわれが彼らと文化も社会も共有していないにもかかわらず、今もなおわれわれの心を興奮させる。(中略) 同様に何百年も前に作られたに違いない幾つかのヴェンダの歌は、今もヴェンダの人々を、そして私を、興奮させる。(中略) 私は、われわれがそれらの音楽をその演奏者と全く同じ仕方で受け取っているとは言わないが、われわれ自身の経験は、通文化的コミュニケーションに何らかの可能性のあることを思わせる。これについての説明は、音楽の深層構造のレベルには、たとえ、それが表層構造には現れなくても、人間の精神に共通の要素があるという事実に見出

すべきだと、私は確信している。(ブラッキング 1978 : p.155-156)

以上のように、表層構造レベル——様式や音列の構成のレベル——では音楽は国境を超えないことは事実だが、人間の精神という深層構造レベルにおいてそれは可能である、とブラッキングは述べる。

「音楽は国境を越える」——その言葉の根底にあるものは、国や言葉が違くとも何かで通じあいたい（通じ合えるはずだ）という想いや願いなのではないか、と私は考える。

註

¹ この点については、柘植元一（1991）の「音楽の普遍性」pp.227-231に概説的で詳しい記述がある。

付記

本研究は、長崎大学大学高度化推進経費「新任教員の教育研究推進経費」からの一部支援を受けた。

引用・参考文献

- 柘植元一（1991）『世界音楽への招待』音楽之友社
徳丸吉彦（1996）『民族音楽理論』放送大学振興会
ナティエ，ジャン=ジャック（1996）『音楽記号学』足立美比古訳，春秋社
ネトル，ブルーノ．細川修平訳（1989）『世界音楽の時代』勁草書房
深田博巳（1999）『コミュニケーション心理学』北大路書房
ブラッキング，ジョン（1978）『人間の音楽性』徳丸吉彦訳，岩波書店